

研究室だより 2024 年度春号

卒業生、修了生の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
2023 年度の西洋史学研究室の近況をご報告させていただきます。

まず教員スタッフに関しましては、岡崎敦先生（名誉教授／フランス中世史・アーカイブズ学・資料学）のご退職にともない、専任教員が私、今井宏昌（准教授／ドイツ現代史）のみとなる、いわゆる「ひとり講座」へと移行しました。そうした中、非常勤講師としては例年どおり、学内より野々村淑子先生（教育文化史）、学外より福岡大学の森丈夫先生（アメリカ植民地時代史）をお招きしたほか、新たに佐賀大学の岡本託先生（フランス近代史）にご来校いただく運びとなりました。また、前期には新潟大学の高垣里衣先生（スペイン・バスク商業史）、後期には福岡大学の西村道也先生（ビザンツ帝国史）による集中講義も開講され、多様な地域・時代をカバーする授業ラインナップを維持することができました。

学部生に関しては、片山陽介、近藤萌々葉、高木啓輔、中村健大、西川颯太、花田さと、松下飛海、水田和花、渡辺黎といった 9 名の学生が新たに研究室の仲間入りを果たしました。大学院修士課程には福岡大学より小野泰誠が進学し、アメリカ黒人兵士の第一次世界大戦経験に関する研究に取り組んでいます。また「コロナ禍」の影響もようやく薄まりつつあり、夏には学部三年の山下桜奈と学部四年の野中諒がフランスに短期の語学留学をおこないました。全面オンライン開催となっていたオープンキャンパスも 3 年ぶりに対面で開催され、多くの高校生や保護者の方が研究室を訪れました。

本研究室にかかわる学会・研究会については、昨年度に続き院生・学生による活躍が目立ちました。8 月に開催された第 23 回九州西洋史学会若手部会 2023 年 8 月企画「中高大連携の現在地：試験から見える歴史の面白さ」では、院生の松本大輝が本研究室卒業生の木寺大祐先生（聖和女子学院高等学校）とともに登壇しました。11 月には第二四回九州西洋史学会若手部会 2023 年 11 月企画「研究報告会」が開催され、安達漱也、吉田美咲、松下飛海が報告をおこないました。また 12 月の九州史学会では、今井が全体シンポジウム「共和国の 20 世紀史」をオーガナイズしたほか、西洋史部会で院生の小野が「第一次世界大戦と黒人アイデンティティ：アメリカ黒人社会における前線兵士をめぐって」と題する報告をおこないました。

また昨年度末の話ではありますが、本研究室修了生である松口優花さんが、修士論文「ヴァイマル共和国における「同性愛者」の自己表象：「同性愛」雑誌における言説分析を通じて」で、大学院人文科学府長賞を受賞されました。本論文の一部は、『九州歴史科学』第 50 号（2022 年 12 月刊）にすでに掲載されています。

以上、簡単ながら今年度の西洋史学研究室の近況をご報告致しました。なお、来年度にはスペイン中世史を専門とされる教授が新たに着任されます。奇しくも、2024 年は九大法文学部創立 100 周年という節目の年です。この間、研究室修了生である前間良爾先生、古賀秀男先生、古賀邦子先生のご蔵書整理に携わるなかで、研究室の歴史の重みを感じてまいり

ました。次の 100 年への思いを新たにしながら、このたびの報告を終えたいと思います。
卒業生・修了生の皆様のご健勝、ならびに益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

(今井宏昌)

会員近著

荒川正晴ほか編／小山啓子ほか『岩波講座世界歴史〈一五〉主権国家と革命：一五～一八世紀』岩波書店 二〇二三年

荒川正晴ほか編／星乃治彦ほか『岩波講座世界歴史〈二三〉冷戦と脱植民地化Ⅱ：二〇世紀後半』岩波書店 二〇二三年

キャプラン、ジェーン（藤井美佐子訳）／熊野直樹監修『一四歳から考えたいナチ・ドイツ』すばる舎 二〇二三年